

〔第26回 学術集会特別講演Ⅱ〕

障害を価値へと変えた日 —未来はいつでもこの手の中に—

京都橘大学看護学部

(座長) 奈良間美保

2019年9月に京都で開催されました日本家族看護学会第26回学術集会の特別講演Ⅱでは、一般社団法人HIFIVE（ハイファイブ）代表の畠山織恵様（以下、織恵さん）、畠山亮夏様（以下、亮夏さん）にご講演いただきました。学会のメインテーマである「心を、つなぐ」を、まさに生き方を以って体現いただいたご講演となりました。

ご講演当日、織恵さんと亮夏さんはとても晴れやかな表情で舞台にご登壇されました。織恵さんは終始笑顔でお話しされ、亮夏さんが絶妙のタイミングで織恵さんの問いかけにこたえてくださいました。きっとお二人は、様々な局面でこのように尊重し合い、一緒に道を切り開いてこられたのでは、と感じました。会場の皆様もお二人に心を寄せて、全体が一体となる温かい雰囲気の中でご講演が進行しました。

織恵さんは、亮夏さんが生まれてからの約20年間の体験を率直に語ってくださいました。そこには笑顔だけでなく、親子の感情がぶつかり合う場面や、亮夏さんの様々な挑戦を見守るご家族の不安なども含まれて、ありのままに紹介されました。言葉だけでは伝えきれない織恵さん、亮夏さん、そしてご家族の軌跡をお伝えいただいたように思います。

お二人のご講演を通して改めて気づいたことがあります。それは、亮夏さんが障がいをもちながらご自身の生き方を模索する中で「伝わりにくいからこそ、伝わることもある」と表現されたことに関係します（詳しくは、畠山さんご執筆の記事をご覧ください）。紹介されたこの言葉には、不思議な力がありました。言葉として発せられるときには生きる主体としての強さを感じられます。それと同時に、言葉を受ける側にとっては、そこはかたない癒しや勇気が生まれるようにも思います。昨今の社会を顧みると、できることとできないことという一定の軸で物事の価値づけが行われる傾向にあります。しかし、人が体験していることは、本来はより多様であり、様々な意味とともに彩られることを、私たちは見過ごしているのかもしれませんが、そこに看護がどのようにあるのかを解明することの意義は大きいのではないかと思います。ご講演をお聴きになった方々が何を感じ、そこからどの様に一步を踏み出されるのか、それもまた多様であることに気づかされます。

たくさんの方の心の揺れや気づきをもたらして下さったお二人に、改めて感謝申し上げます。そして、益々のご活躍をお祈りしております。